

はじめに。

本書は、存在とは何かから入り、存在物とは何か、空間とは何か、時間とはなにか、物質とは何か、生命とは何か、そして自己自身とは何か、これらの疑問に関して思索してきたことを集約したものである。

「存在と存在物」および「存在物としての宇宙」を研究したものであり、同時に実存的思索の記録である。実存的思索は、一著作のなかでまとまった形を獲得することも、一思想家のなかで終局的な完成を獲得することもできないものである。それは不断に現在のなかで遂行されるべきものである。

本書は体系を志向するものではない。そのため本書の形式はアフォリズム的な論考形式になっている。その都度思索し、感じたことを記したものである。

「何故私たちはここにいるのか?」、「何故有があるのか?」、「存在とは何か?」、「存在物とは何か?」、「世界(宇宙)とは何なのか?」、「自分とは何物なのか?」、という問いが本書を流れる大きな主題である。私の知りえた様々な分野の思想、哲学、科学、を網羅して、これらの問いを追求してきた軌跡である。

現代人は錯覚と共同幻想のなかで無意識のうちに日々の生活に追われ、本当は何が真実なのかと問うこと自体を忘れてしまっているのが現状だと思われる。

周知の常識的事実だと思っていた事がが実は違っていたり、あるいは疑問さえ感じなかった概念自体が虚構・錯覚である、ということが科学的な面からも明確になりつつある。それは科学の分野だけではなく、人間の歴史、経済、文化の面でも同様である。

そのため、既成観念を払拭しーから本質的に世界をそして自分を考え直す必要を感じていた次第である。

また、本書は、「存在」、「存在物」、「空間」、「時間」、「次元」、「エネルギー」、「物質」、「情報」 およびそれらの相互関係を、現代物理の成果や歴代の先哲による哲学的思想によって、その本質的意味を見出すべく思索した結果でもある。

現時点では仮説であるが、多宇宙が存在するとして、ブレーン宇宙が存在するとして、超弦理論、M理論が存在するとして、AdS/CFT対応がが存在するとして、如何に歴大な世界の構造が、世界の仕組みが解明されようと、そしてそれらが体系化されようと、「存在」と「存在物」への問いは全く次元を異にする概念である。それらの世界定位は常に後退し、一般化され、汎化され、そういう過程のなかで一つの近似となっていくものである。世界定位は際限のないものである。

また本書を読む上では、「存在と存在物とは全く違う次元の概念」であることを解らずしては何も進みようがない。  
全ての顕現し存在しているものは有という”徴”を帯びてこの有に滞留している。

己自身が、その定位できないこの”有”の”徴”を帯びていて、その全てに徹頭徹尾、貫かれている。  
そして世界定位できない空間とか時間とかという概念の中で当然のごとく当たり前で生きている。

それらの「概念」といわれるものは、人間という生物的有機系の持つ或る固有な情報の把握機能や認識能力の範囲に自ずと限界を持ち、或る限定され抽象化された対象に対する構想力のなせる技であるということだ。

私が見ている、聞いているこの瞬間はこの宇宙の中で1回限りの世界事象である。

生と死の間での有のなかでの滞留によって、この宇宙を見ている。実存の唯一性と代理不能性として。

ウイルチェック流に言えば、私を構成しているものは宇宙を構成しているものと同じであり、私は多層、多色の超流動体の中で生きている。そしてその意味の確たる確信もなく存在している。

それらの情報マトリックスの中の一つの情報系のノードとして私は情報マトリックスの只中にいる。

私は付与され自己意識を持って情報の海の中にいる意識情報系としての”出来事”である。

私は有と無を超えたところに根拠を有する、ある存在する「もの」であり、そしてある「出来事」である。

そして次元を超えた源に根拠を持つと想定される意識によって主観、客観、分裂によって展開されている世界を対象として意識している。

世界は、宇宙は、”もの”というよりは情報そのもの、包括的概念としての情報の情報相関そのものである。  
”もの”はエネルギーのソリトンであり、エネルギーは概念化が不可能な包括的概念としての”情報”に似たある抽象的な関連性そのものである。

このようにして宇宙は私の中に浸み込んでいると同時に、私もこの宇宙に徹頭徹尾、浸み込んでいる。

ハイデッガーは「形而上学入門」のなかで言っている。

- 存在とは根本の出来事であって、それを根拠にして初めて、  
開示された全体としての存在者の只中で、歴史的現存在が叶えられているのである。
- 存在についての問いにおいて、明らかに無という限界にまで進み、  
この無を存在の問いの中へと引き入れること、これがニヒリズムを真に克服するための第一の、  
そして唯一の有効な歩みである。
- 存在を忘却して、ただ存在者だけを扱うこと、これがニヒリズムである。  
ニーチェが「力への意志」の第一巻で明示したあのニヒリズムの根拠である。
- 存在と存在者との区別。存在は根底から、新しく経験されねばならない。

科学が全体知でないと同様に哲学もまた決して全体知ではありえない。

真正の哲学とは、実存の歴史性において存在を覚知することによって、生ける人間存在の自由の空間を開くものである。しかし真正の哲学は科学を通してのみ到達されねばならない。

存在全体は完結した全体として対象的には捉えられない。無限に開かれた全体という意味をもっている。

実存的に哲学することは、特殊なものや、部分的なものなどの有限的なものを超えて、存在そのものを探求することである。

それはその都度の限界状況における挫折と、超越による存在認識の変革を通じて「存在そのもの」の根源への浸入を試みることである。

人間は絶えず、そして本質的に逃げ道なく生成、消滅のダイナミクスのなかで常に死に對しているのである。

存在と存在化された宇宙とは生起する不気味さそのものであると同時に、人間が本質的に帰るところでもある。

本書は第1部は、「世界定位」(世界解釈)、第2部は、「実存」に関して、第3部は、「存在」という超越性。

第4部は、「手記」、「日記抄」、の4部からなる。

三つに分類した「世界定位」、「実存」、「存在」は、元来各々が独立したテーマではなく互いに相関関係にある。

2015/4/3

富田 行博